

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02575

研究課題名(和文) 戦間期及びナチ時代のシュラーガーにみる、ポップ・カルチャーとしての同性愛文化研究

研究課題名(英文) A Study of Homosexual Culture as Pop Culture, as Seen in Interwar- and Nazi-Era Schlager Music

研究代表者

相原 剣 (Aihara, Ken)

明治大学・法学部・兼任講師

研究者番号：30726469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：戦間期及びナチ時代のシュラーガー(流行歌)を主要な分析対象とし、ポップ・カルチャー研究の視座を持った同性愛文化研究を行うことを目的として、本研究を遂行した。同性愛文化研究、シュラーガー分析、メディア分析など、様々な分野に渡る調査を行い、研究を相互に関連付けていった。各分野が複合する存在として焦点化した歌手パウル・オモンティスと作詞家ブルーノ・バルツについては、特に重点的な分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

レコード産業勃興期のシュラーガー(流行歌)の分析を通して、文学研究と歴史研究をポップ・カルチャー研究およびアクチュアルなクィア研究と接続させる試みである。マイノリティのサブ・カルチャーと規定されがちな戦間期及びナチ時代の同性愛文化をメイン・カルチャーへ移行しつつある動態として捉え、戦間期の同性愛解放運動の広がり、その過程で表出するホモフォビア(同性愛嫌悪)について複合的な領域から考察を行った。

研究成果の概要(英文)：This study primarily analyzes Schlager (popular songs) from the interwar period and Nazi era and aims to investigate homosexual culture from the perspective of pop culture research. The examination covers a range of fields, including homosexual culture research, Schlager analysis, and media analysis, and links the study to each. Singer Paul O'Montis and lyricist Bruno Balz, who formed a focal point in the overlap between these fields, are analyzed with particular emphasis.

研究分野：独文学・独語圏文化

キーワード：シュラーガー 同性愛文化 ポップ・カルチャー 娯楽音楽 レコード産業

1. 研究開始当初の背景

(1)

電気式蓄音機の実用化に伴って一般にも流通し始めるレコード(SP盤)を通して、戦間期以降、数多くのシュラーガー(Schlager: 流行歌)がそれまでの規模を遙かに上回る形で流行する。その担い手には、カバレット(Kabarett)で活躍していたユダヤ人・同性愛者が多く含まれていたが、政治風刺の場であるカバレットに関する文化・歴史研究における「弾圧と抵抗」といった図式化は、文化構造としての「猥雑さ」や「不埒さ」が衛生化される傾向を生む。一方で、その刹那のアクチュアリティや通俗性が、小芸術(Kleinkunst)といった蔑視を招く。これらの傾向を強く誘発するが故にこれまで独文学研究の関心の埒外にあった同性愛をテーマにしたシュラーガーを、同時代の抒情詩とも比較しながら分析することで、マイノリティのサブ・カルチャーと規定されがちな当時の同性愛文学・同性愛文化を、メイン・カルチャーへ移行しつつある動態として跡付けることを企図して本研究はスタートした。

(2)

ドイツ語圏の同性愛文化に関する先行研究としては、マグヌス・ヒルシュフェルト協会による成果が多数存在した。特に本研究のテーマとの関連では Marita Keilson-Lauritz による広範な研究が活用できる状況にあった。ヴァイマル期からナチ時代への同性愛文学の連続性を跡付けていくものとしては Christian Klein の著作が挙げられる。カバレットにおける同性愛文化に関しては Mel Gordon による概観に加え、主に舞台芸術を対象とする Wolf Borchers による論考がある。シュラーガー研究の古典としては Werner Mezger によるものが挙げられる。つまり、各分野に於ける資料はある程度揃った状態にあったが、本研究課題が有する複合的な要素を構造的に分析する視点は欠けていた。特に歴史と文学を架橋する研究はほとんどなく、本研究に直結する先行研究としては、20世紀以降のレコードやCDに於ける同性愛の表象を概観した Ralf J. Raber の *Wir sind wie wir sind* (2010年) がほぼ唯一のものとして挙げられる状況であった。

(3)

ヨーロッパに於いて同性愛文化研究とポップ・カルチャー研究を架橋する先進的な試みを行う研究機関が、ベルリンとウィーンに存在する。1985年にはベルリンにゲイ博物館(Schwules Museum)が、2007年にはウィーンにゲイ/レズビアン文化歴史センター(QWIEN)が設立されたが、日本との本格的な連携はこれまで存在しなかった。ベルリンのゲイ博物館はポップ・カルチャーに関する膨大な資料を有し、ベルリンのローカルな同性愛シーンの資料も多く収集している。またゲイ/レズビアン文化歴史センターは、戦後オーストリアの有力なゲイ・ジャーナリスト Erich Lifka の遺した膨大な資料を2009年に購入しており、赤いウィーン時代から大戦に至る時期のウィーンの同性愛文化事象の検証も可能な状況が整いつつあった。

2. 研究の目的

(1)

戦間期からナチ時代に流布した同性愛をテーマにしたシュラーガーを重点的に分析する。政治的な風刺の実践であり、当時のポップ・ミュージックでもあったシュラーガーの分析には、特に改作・改変の推移など文献学的なアプローチを伴った抒情詩研究の手法が必要となる。詩及び詞の形式・韻律分析と文化・社会現象の考察を綿密に関連付け、シュラーガーに表出する当時の同性愛文化を、メディア・コンツェルンの動向を背景として様々なメディアを通してマイノリティ文化からメジャーな文化へと移行していくポップ・カルチャーと捉え、その様相を明らかにすることを目的とした。

(2)

ポップ・カルチャーとしての同性愛シュラーガーを考察する上で、そのポピュラリティと並んで、マイナー性に留意する必要もある。メディアのなかで同性愛モチーフがどのように隠され、また一方でどのように人口に膾炙していくのかを明らかにすることを目的とした。少数で短期的に発行され度重なる複製を経て流通し、当時の同性愛シーンの紐帯となっていく同人誌やピラ等に掲載されたシュラーガーの猥雑かつ仄めかしに満ちた表現は、この点を明らかにする分析対象として格好のものである。差別・被差別の図式に留まらず、同性愛者自身が胚胎するホモフォビア(同性愛嫌悪)をも個々の作品研究のなかで明らかにすることを目指した。

(3)

ソネットやオーデ、ガゼールといった擬古典的な形式志向とある種の後進性のなかに、シュラーガーの通俗性にも共通する、現代に通じるポップ感覚の萌芽を読み取ることが可能だと考え、これまで社会的・文化史的な扱いに留まってきたシュラーガー(流行歌)を抒情詩分析の手法を用いながら文学研究のなかにしっかりと定位させ、さらに現代に至るポップ・カルチャー研究とアカデミックな文学・文化研究の架橋を行うことを目的とした。

また、歌手パウル・オモンティスの振る舞いやヒトラーの同性愛性を揶揄するマックス・ハンゼンの風刺的シュラーガーなどは、スーザン・ソントグによって定義されたポップ・カルチャーと

してのキャンプ (Camp) 感覚を含むものであり、政治性及び狭義の文学性のみに着目した読解では十分に解き明かすことは出来ない。同性愛文学・同性愛文化を主要な対象として、ドイツ文学・文化研究、マイノリティ文化研究、ポップ・カルチャー研究において自明とされる境界を越えることを企図した。現代に通じるポップ・カルチャーの起点となる動態を、歴史的視座を有する文献学的文学研究から見極める試みである。

3. 研究の方法

戦間期及びナチ時代のシュラーガー (流行歌) を主要な分析対象とし、特にポップ・カルチャー研究の視座を持った同性愛文化研究を行うことを目的として本研究を遂行した。

- A) 戦間期及びナチ時代の同性愛文学・文化研究
- B) シュラーガー・抒情詩研究
- C) 雑誌・新聞・劇場・レコード・ラジオ等のメディア分析
- D) 政治・社会・思想等の背景分析

上記四分野についてそれぞれ調査を行い、研究を相互に関連付けていった。従来、主に歴史研究として行われてきたドイツ語圏の同性愛文化研究を、レコード産業勃興期のシュラーガーを分析対象として遂行すべく、未整理の資料を解き明かしていった。研究分野の未踏性故に、これには相応の時間を要することとなった。それぞれの分野の基礎的な資料分析と、これまで関連を踏づけられてこなかった分野を複合的に扱う作業を平行して行った。分析対象は多岐にわたるが、以下にその一端を示す。

A) 戦間期及びナチ時代の同性愛文学・文化研究

同時代の同性愛文学研究である *Das Sexualproblem in der modernen Literatur und Kunst* (1927) や *Die Freundesliebe in der deutschen Literatur* (1931) の批判的分析を起点とし、当該期の同性愛解放運動家であるヒルシュフェルト、ジョン・ヘンリー・マッケイ、アドルフ・プラント等の思想的な差異を精査していった。その際、同性愛文化研究叢書 Bibliothek rosa Winkel の成果を活用した。特に Marita Keilson-Lauritz の *Die Geschichte der eigenen Geschichte*、Andreas Brunner 編纂のアンソロジー *Männer mag Mann eben* からは多くの示唆を得た。その上で、ベルリンのゲイ博物館及びウィーンのゲイ/レズビアン文化歴史センターのアーカイブで得た資料の分析を行っていった。

B) シュラーガー・抒情詩研究

まず、Werner Mezger の *Schlager* (1975) や Christian Schär の *Der Schlager und seine Tänze im Deutschland der zwanziger Jahre* (1991) といった基礎文献の整理・分析から始めた。特に同性愛をテーマとするシュラーガーに関して、Ralf J. Raber の *Wir sind wie wir sind* (2010) を先行研究として精査し、批判的に深化させるべく関連事象の検証を行った。研究のなかで焦点化した歌手パウル・オモンティス、作詞家ブルーノ・バルツに関しては特に集中的な調査・分析を行った。前者についてはベルリンのゲイ博物館及びザクセンハウゼン強制収容所のアーカイブ、後者についてはベルリンのブルーノ・バルツ・アーカイブの資料を活用した。抒情詩との関連分析にあたっては、ウィーン労働者組合等で日刊新聞の保存記録を長年担当したエッカルト・フリーユによって整理された資料をウィーン市庁舎図書館にて調査し、分析を行った。

C) 雑誌・新聞・劇場・レコード・ラジオ等のメディア分析

同性愛雑誌・新聞、レコードの歌詞やピラ等を中心に資料収集と調査を行った。現地調査を行った各アーカイブは、戦間期からナチ時代の同性愛者に関する文献・資料が特に充実しており、そこで得た資料によって同性愛をテーマとしたシュラーガー成立の背景分析が可能となった。

D) 政治・社会・思想等の背景分析

男性同性愛を禁じる刑法 175 条に関して、『*Anders als die Andern*』(1919年)等の映画の分析を行い、当時の同性愛に関する禁忌の実態を精確に跡付ける作業をおこなった。また、ベルリンやウィーンにおける現地調査を通して、マイノリティの領域からメジャーな領域へと移行する文化動態のなかに現れるホモフォビア (同性愛嫌悪) の表象についての意見交換を行った。

4. 研究成果

(1)

戦間期及びナチ時代のシュラーガーに関して、同性愛者としてザクセンハウゼン強制収容所で殺害された歌手パウル・オモンティスを主要な分析対象として研究を遂行した。その際、現代に通じる複製可能なポピュラー音楽の起点としてのシュラーガーに関してはバウジンガー、メッツガー、ゲッツェ、ハース、シドー等、同性愛文化に関してはヒルシュフェルト、プラント、マッケイ、ブルナー、ケイルソン-ラウリッツ等、新旧先行研究の分析も進めた。オモンティス

に関しては、ヴァイマル期に於けるレコード産業の発展やユダヤ人問題など、同性愛文化研究をポップ・カルチャー研究として遂行するにあたって重要となる諸要素を孕んだ典型的な事例であり、本研究課題の起点としての論文を執筆した。この論文は、同性愛文化、ポップ・カルチャーに対する複合的視座を新たに獲得することを目的とする本研究課題全体の見取り図を為すものである。

今後を見据えた成果としては、ベルリンのゲイ博物館、ウィーンのゲイ/レズビアン文化歴史研究センターというヨーロッパを代表する二大同性愛文化研究機関と継続的協力関係を構築したことが大きい。

アルフレート・グリューネヴァルトに関する国内の既存資料の不足に関して、日刊新聞のアーキピストであるエックハルト・フリューが整理した多数の一次資料の収集と分析をウィーンに於いて行った。またグリューネヴァルトの未発表書簡資料等に関して、ウィーンのゲイ/レズビアン文化歴史研究センターの協力も得られた。また、ザクセンハウゼン、マウトハウゼン、プレッツェンゼー等の収容所・監獄施設において、収容所に於ける娯楽音楽の資料を多数得る事ができた。

(2)

戦間期及びナチ時代のシュラーガーに関する本研究課題全体を通して中心的な分析対象となる作詞家ブルーノ・バルツについての研究を具体的に進めていった。ナチ時代の娯楽音楽・シュラーガーの歌詞を多く手がけ、戦後も数多くのエバーグリーンを生み出したブルーノ・バルツは、ベルリンでヴァイマル期に活発になった同性愛解放運動のアクティビストでもあり、二度にわたって同性愛者として投獄され、その後匿名での作品発表を余儀なくされた。結果として、第二次世界大戦開戦時に大ヒットをしたフォックストロット・マーチャ、ザクセンハウゼン強制収容所移送直前に釈放の条件としてゲッベルスが要請した、娯楽映画『大いなる愛』の四曲の挿入歌などが、戦後に戦争犯罪として問題となり、作品自体の圧倒的な知名度とその重要性にも関わらず、現在に至るまでドイツに於いても本格的な研究は未踏であった。ブルーノ・バルツ・アーカイブ及びバルツの包括受遺者であるユルゲン・ドレーガー氏とのやりとりを通して、これまで明らかではなかったバルツの来歴を跡付け、重要作品の分析を行い研究論文として発表した。また、特に戦後強く非難される娯楽音楽としての「ドゥルヒハルテ・シュラーガー (Durchhalteschlager)」について具体的な分析を行った点は大きな成果と言える。

また、文学研究と歴史研究をポップ・カルチャー研究及びアクチュアルなクィア研究と接続させるという本研究課題の根本を実現するため、日本ポピュラー音楽学会において、現代に直接の連続性を持つポピュラー音楽の基点としてバルツを位置付けた発表を行った。

(3)

ヴァイマル期及びナチ時代の同性愛シーン・関連状況について、ベルリンのノレンドルフ地区、パンコウ地区など解放運動の拠点の実態分析、当時の旅行ガイドの精査を、広範な資料を基に進めていった。マグヌス・ヒルシュフェルトやフリードリッヒ・ラッツワイト、アドルフ・ブランツ等の個人史にとどまらず、都市文化としてベルリンの同性愛解放運動全体を俯瞰的に捉え直すべく研究を遂行した。ラッツワイトによって1924年に発行された世界初のレズビアン雑誌 *Die Freundin* については、ブルーノ・バルツとの関わりのなかで重点的に調査・分析を進めた。

同性愛文化研究叢書である *Bibliothek rosa Winkel* の成果を土台としながら、マイノリティの領域からメジャーな領域へと移行する文化動態のなかに現れるホモフォビア(同性愛嫌悪)の表象に焦点をあてた文献調査も広範に行い、当時の同性愛に関する禁忌の実態とポップ・カルチャーへの表出をデータ化し整理していく作業を進めた。

また、収容所環境下でのポップ・カルチャーの実態を解き明かすべく、収容所で作成された歌集に着目し、そこで改作・替え歌を分析し、強制収容所に於ける娯楽音楽の有り様を明らかにする作業を進めた。

(4)

当初計画と比べると、研究基盤の構築及び基礎研究により多くの時間を割くこととなったが、海外研究拠点と連携を取りながら新しい研究領域を開拓することとなった点は大きな成果と言える。最終年度にベルリン及びミュンヘンの研究機関で行う予定であった発表(既に論文にまとめたパウル・オモンティスに関する更なる研究成果や、同性愛者を数多く収容したザクセンハウゼン強制収容所で作成された歌集の分析等)や期間内の最終調査を、COVID-19の流行によって中止せざるを得なかったことは非常に痛手であったが、オンラインによる持続的な研究協力環境をより一層洗練させる機会とすることが出来た。期間後も各研究機関との協力体制を維持しながら研究を深化させていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 相原 剣	4. 巻 14
2. 論文標題 ブルーノ・バルツとは誰か? : ベルリンのゲイ・アクティビスト、ヒトラーの秘密のヒットメーカー、エバグリーン作詞家	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 229 - 241
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://hdl.handle.net/10083/00062217	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 相原 剣	4. 巻 13
2. 論文標題 パウル・オモンティスのシュラーガーに現れるヴァイマル期の時代現象 : 78回転レコード、同性愛、ユダヤ人問題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 85 ~ 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://hdl.handle.net/10083/60852	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 相原 剣
2. 発表標題 ベルリン及びウィーンのアークイブに於ける戦間期・ナチ時代のシュラーガー・同性愛文化及び収容所関連の調査報告
3. 学会等名 明治大学ドイツ語圏文化研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相原 剣
2. 発表標題 作詞家ブルーノ・バルツとナチ時代の娯楽音楽
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第 29 回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----